

ボランティアを支えた オール青山の一体感



卒業生

秋山 恵美さん

AKIYAMA Emi

1994年埼玉県生まれ。2013年女子短期大学現代教養学科入学。Blue Birdに参加し女子短大在籍中岩手県宮古市を4回訪問、ボランティア活動を行う。2015年大学経済学部経済学科に2年次編入学、MF3.11東北応援愛好会で宮古市での活動を継続。2018年株式会社エス・エム・エスキャリア入社。

卒業生

廣瀬 美栄さん

HIROSE Mie

1993年千葉県生まれ。2011年女子短期大学家政学科入学。2年次の冬からBlue Birdに参加、2013年大学経済学部経済学科に3年次編入学し、宮古市でのボランティアを目的としたMF3.11東北応援愛好会を同期の編入学生たちと設立。2015年株式会社千葉銀行入社。



2013年3月 宮古地区災害廃棄物破碎・選別業務委託-瓦礫処理の工程を見学

女子短期大学で実現した現地でのボランティア活動

— お二人は女子短大で東日本大震災の被災地支援ボランティアチームBlue Birdに参加、大学編入後はMF3.11東北応援愛好会で宮古市で活動されました。ボランティアへの情熱はどのように培われたのでしょうか。

廣瀬 小学生の時からガールスカウトで募金活動やごみ拾いなどを経験し、今も籍を置いています。この長年の活動で興味を持ち、さらに女子短大入学時は東日本大震災の影響で入学式が行われなかったこともあり、被災地で自分にできることはないだろうかという気持ちが強くなりました。

秋山 もともとボランティアに興味があり、高校にJRC(青少年赤十字)部があったので入部しました。東日本大震災の街頭募金活動を行ったほか、地域の清掃活動や特別支援学校で障がい者と一緒にイベントの出し物を作ったりしました。募金活動では貢献できているという気持ちはありましたが、やはり現地を自分の目で見たいという思いが強かったです。

廣瀬 秋山さんとは2歳離れていますが、私が大学編入学後も1年間

Blue Birdの活動に同行させてもらっていたので、一緒に活動していました。秋山さんはすごく気が回って、周りをよく見て動いてくれます。後輩の面倒見もよく、先輩からも頼りにされていました。

秋山 廣瀬さんはともしっかりされていて決断力もあり、引っ張ってくれる頼もしさがありました。震災から何年も経つと、参加する学生の中には「とりあえず行ってみる」という軽いノリの人も出てきたのですが、廣瀬さんはそういう人に対してもきちんと指導してくれました。

廣瀬 もしも現地で失礼な振る舞いがあったら、被災者の方を傷つけてしまう可能性もあります。私たちは青学生として活動をしていましたから、大学の代表で来ているという責任感を持ってほしいという思いもありましたね。

大学編入学後も宮古市での活動を継続

——Blue Birdでの活動内容を教えてください。

廣瀬 私たちは宮古市でがれきから掘り出した思い出の品の洗浄、ハンドベルの演奏奉仕活動を行い、田老地区では、被災地研修「学ぶ防災」に参加しました。私が初めて宮古市に行ったのは2013年、女子短大2年次の冬です。津波に襲われた景色はテレビで見えていましたが、現地で「本当にここに家があったのか」と疑いたくなるほどの光景を目の当たりにしたときはショックでした。

秋山 映像を見るだけでは分からないことはたくさんありました。たとえば「学ぶ防災」では、防潮堤の上で震災当時の話を聞くのですが、冬は身を切るような冷たい風にさらされて、とんでもない寒さです。そこに津波が押し寄せたという生々しさは、実際に立ってみなければわかりませんでした。また、1年次の夏に初めて宮古市を訪れたとき、被災者にとって辛いことの一つは、震災が風化して忘れられていくことだと知りました。けれど「私は忘れていないしこれからも忘れません」という言葉だけで本当に伝わるのか、すごく考えさせられました。現地では夜にシェアリングの時間があり、その日の活動内容や感じたことについて各々話して共有するのですが、無力さを感じることも多々ありましたね。

——お二人とも大学の経済学部編入学され、今度はMF3.11で宮古市でのボランティアを続けられました。

廣瀬 大学でも宮古市での活動を続けたいと思っていました。けれど宮古市に特化した復興支援活動を行っている団体が見当たらなかったため、Blue Birdで活動していた編入学生の受け皿になれたらという思いも含め、私たちの代の編入学組でMF3.11を設立しました。編入後に参加した秋山さんも私も、何度となく宮古市に足を運んでいるうちに、第2の故郷のような思いが生まれてきました。次第に会いたい人に会いに行く、そしてそのとき自分のできることをするという自然な姿勢になっていった気がします。

秋山 私は大学経済学部編入学し、女子短大から合わせて5年間ボランティアに打ち込みました。また、大学では当初考えていたより1年長く学ぶことになり、その分じっくり勉強できました。矢吹初先生のゼミで鍛えられ、懸賞論文に入賞できたことはうれしかったですね。



2014年8月 田老防潮堤の上での被災地研修



幼稚園から大学院まで、オール青山の強み

——ボランティア活動は、卒業後の進路にも影響がありましたか。

秋山 宮古市でのホームステイ先が接骨院や介護施設を運営している方々だったことで、現地で現場を見る機会にも恵まれました。その結果、医療介護の現場で働く人を元気にできる仕事に就きたいと思うようになり、現在勤務している医療・介護の人材支援会社に行きつきました。

廣瀬 天変地異に遭遇したときお金がないことは、被災者の心身にさらなる負荷をかけると痛感しました。自分はなにか起きたときに、お金の面でアドバイスやサポートができるようになりたいと思い、銀行を選びました。

——ボランティア活動で得られたことや学んだことは何でしょう。

秋山 自分が一步踏み出さなければ、知ることができないことがたくさんあるということです。その体験が蓄積され、自分の人生におけるぶれない芯をつくってくれた気がします。

廣瀬 一つ挙げるなら個人の活動には限界があるということです。震災から8年以上経った今も定期的に支援活動を続ける学校は、そうないと思います。青山学院の理解とサポートがあるからこそ継続できるのだと思います。初等部生から大学生まで共に宮古市に行って開催した「グリーンピア三陸みやこ夏まつり」では、オール青山の一体感を肌で感じました。

秋山 宮古市に岩手県初のフェリー航路が就航したことを記念した「アートでつながる壁画プロジェクト」では、オール青山に加え、2016年の熊本地震被災地支援ボランティア活動で本学と交流を持った九州ルーテル学院の生徒も参加しました。キリスト教というつながりで生まれる交流も、青山学院の良いところだと思います。

——最後に、在校生へのメッセージや今後の抱負をお願いします。

秋山 女子短大・大学で学んできたこと、ボランティア活動での経験が就職活動の軸になりました。皆さんも青山学院の学びの中で自分のやりたいことを見つけ、社会で輝き、そして貢献できるような人になってください。

廣瀬 青山学院は幼稚園から大学・大学院まであり、一丸となって物事に取り組める体制が整っているので、ぜひそういった活動を今後も続けていただけたら、卒業生としてすごくうれしいです。



2015年3月 宮古第一病院でのハンドベル演奏